

農薬豆知識

病気のお話 《たまねぎ白斑葉枯病》

Q1:たまねぎ白斑葉枯病の発生状況

たまねぎ白斑葉枯病(仮称※)は全道的に発生しているたまねぎの重要病害です。発生程度は年により差がみられますが、常発病害で薬剤による防除を欠かすことができません。発生程度には品種間差は認められませんが、抵抗性品種と呼べるものは今のところ開発されていません。

※本症は特定の病害としては扱われていないため。



年	発生面積	被害面積
	ha(面積率)	ha(面積率)
1976	3,400(43%)	200(3%)
1979	3,400(40%)	400(5%)
1981	7,850(97%)	1,400(17%)
1992	7,665(53%)	1,698(13%)

(病害虫発生予察年報による)

Q2:たまねぎ白斑葉枯病の病徴は？

たまねぎ全生育期間を通じて発病します。苗床での症状は、幼苗の葉にやや大型の数mm長の白い斑点(写真)を生じ、時にはこのため苗が枯死することもあります。圃場では、定植後6月中旬から下旬頃に発生し、下葉の葉身に小斑点を生じ、次第に融合して白色の大型病斑となります。病気になってしまった葉は先端から枯れ始め、病気が進むとほとんど全葉が枯れてしまいます。白斑葉枯という通称ですが、白斑を生ずることなく、葉先から枯れてしまうこともあります。



Q3:たまねぎ白斑葉枯病に関与している菌は？

白斑葉枯病に関する <i>Botrytis</i> 属菌	他に侵す作物
<i>Botrytis squamosa</i> (小菌核性腐敗病菌)	ねぎ・にら
<i>Botrytis cinerea</i> (灰色かび病菌)	豆類・ウリ類など
<i>Botrytis allii</i> (灰色腐敗病菌)	にんにく
<i>Botrytis byssoidea</i> (菌糸性腐敗病菌)	にら
<i>Botrytis tulipae</i>	チューリップ

5種類の*Botrytis*(ボトリチス)属菌と呼ばれる菌が関与しています。

このうち主体となる菌は*Botrytis squamosa*と*Botrytis cinerea*で、後者においては、「灰色かび」の名称が与えられているものの大部分の病原菌で、豆類をはじめとする多数の作物を侵します。

Q4:たまねぎ白斑葉枯病の伝染経路および発生要因は？

たまねぎ白斑葉枯病菌は菌の塊(菌核)や枯死葉の組織内に菌糸が入り込んだ状態で土壌表面で越冬し、翌年

の感染源となります。高湿度や雨天が続くと多発し、多肥、殊に窒素質肥料多用で軟弱に生育したたまねぎに発病が多くなります。

Q5:たまねぎ白斑葉枯病の防除方法は？

圃場に被害茎葉があると病原菌が広がってしまいますので、拡大を防ぐには被害茎葉の処分が効果的です。しかしこれは大面積で作付けする北海道では現実的ではありませんので、実際には薬剤による防除が必要となります。

薬剤防除は、発病前から予防的に薬剤散布を行うことで発病を抑えます。特に予防効果が高いのはフロンスайд水和剤(1000 倍)で、この薬剤を核にしながらしルバキュアフロアブルやベルコートフロアブルなどを7日から10日間隔で散布するのが効果的です。

(2010年2月 裕樹のチカラ記)



参考文献

新村 昭憲(2008) 北日本病害虫研報, 59, 230